東海西部地方における勧誘表現の言語地理学的研究

彦　坂　佳　宣

はじめに

愛知県を中心とする勧誘表現に助動詞マイによるものがあり，この地域の方言の特徴の一つとなっている。いま，各種の方言会話集から例を引くと次のようなものである。

○ワタシラモ，ギボシ（山菜の類）　テモノ　トリーイッテコマイカッテ（取りにいって来ようと思って）（山口幸洋『方言文記録資料（8）岐阜県揖斐郡徳山村塚方言』104頁）

○マー　ホイジャー　ソノトキニ　マター　ユックリ　ヤラマイカン（またその時にゆっくりやりましょうよ（豊橋市伊古部，『愛知のことば』149頁）

○ソイジャー　イショニ　イカマイカ（それでは一緒にいこうよ）（愛知県北設楽郡富山村（国立国語研究所『方言談話資料（9）』97頁）

このマイによる形式は，打消し推量のマイにカを付けた未来否定疑問文を相手に投げかけることによって勧誘表現としたものである。当地域の勧誘表現には，また「行コウ」「行カンカ」「行カズ」（助動詞ウズによるもの）など，各種の助動詞類によるものも行われている。

このように今日の共通語で使用される形式にくわえ，当地方に特有の形式もまじっていて，方言様態そのものとしても，またこれを広い意味での国語史の中に位置付ける問題としても，興味のある地域なのである。

東海地方近辺のこうした勧誘表現については，個別的な言及はあるものの，

（1）当地域全体としての分布様態

（2）各語形間での使い分け

（3）さらに進んで，中央語の歴史とも関連した視野からの定位

などについては，江端義夫氏の研究などを除いてあまり研究が進んでいない[注1]。本稿はこうした点について，まず今日的な様相を中心とする（1）（2）を考察するも

のである。（3）については江端氏の論も参考にしつつ続報を予定している。

一、東海西部地方の勧誘表現

東海西部地方を中心とするデータは，すこし前になるが1985年前後に私が70歳前後の生え抜きの方を主たる対象者として隣地調査したものである。

その中から勧誘表現として〈親しい人に対して「一緒に行こうよ」と言う時の方言訳〉に従って考えてみる。今回は，その回答の第1答と第2答を整理した。後でもふれるように，この表現法には複数の形式が共存し，使い分けられている。そのため，第2答までの回答をとりあげて考察するのである。この中で，特に最初に紹介した助動詞マイによるものがこの地域の特色と思われるので，まずマイ類によるものを図1としてとりあげ，次に図2でマイ類以外のものに分けて考えていく。

（一）マイ類の検討

図1には明瞭な分布上の特色が見える。それはマイの承接形態の違いに関係している。

丸印類のイコマイ・イコマイカなどの類（以下，イコ～類とする）が西から濃尾地方中央一帯にある。これは，

○一緒にイコマイカ

など，意志形にマイカの付いた形である。場合によっては，カを付けずに～マイだけの場合もある。

これに対して，傍線類のイカマイ・イカマイカなどの類（以下，イカ～類とする）は美濃北部，飛んで愛知県知多・三河から長野・静岡県寄りに広くある。これは，

○一緒にイカマイカ

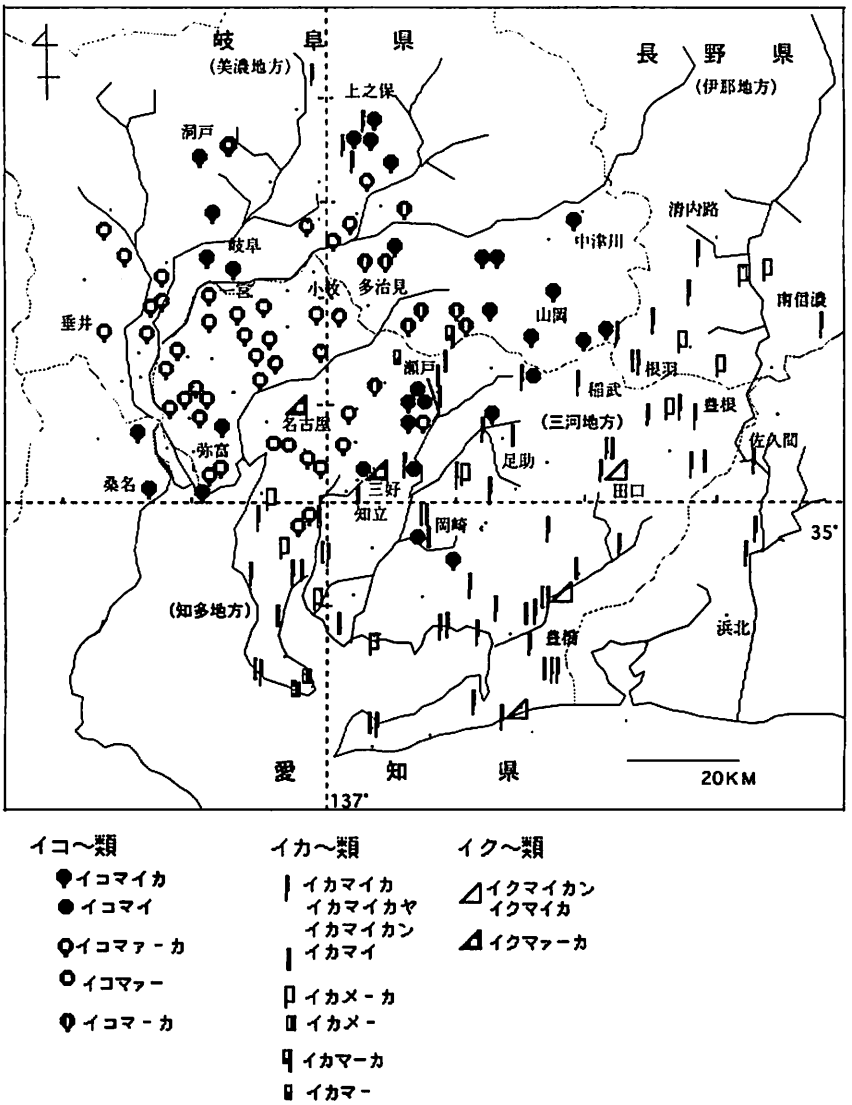
などの言い方で，未然形にマイカが付いた形であり，やはり場合によっては～マイだけの形もある。

イクマイカなどのイク～類も，イカ～類の分布の中に東三河を中心に南部に数地点あるが[注2]，大きくはイコ～とイカ～の両者が分布域をきれいに分けている。西部にイコ～類，その北部・東部にイカ～類，東部にわずかにイク～類（イクマイ・イクマイカなど）という，承接形態の差異を反映した分布がみられるのである。

分布の解釈

この分布は，近世期前後以降の歴史的な地域性を色濃く反映しているようである。すなわち，イコ～類の分布地域は，かつて尾張藩のあった地域を中心に，隣接する美

図1　「一緒に行こうよ」マイ類のもの



濃地方に及んでいる。尾張藩は早くから大きなまとまった政治圏をもち，通商・経済圏としては木曽川を越えた西美濃地方とも活発な交流があった。こうした交流圏がイコ～の分布地域と対応するのである。

また，尾張から東部へは，東美濃や西三河の足助地方などを経由して信州へとつながる交易路が発達していた。イコ～類はこの経路を通して，東美濃や足助地方にも伝

播した形跡が見られる。東部へは，尾張藩に隣接する西三河の安城・岡崎といった東海道筋にも，やはりいくら進出している。

これに対して，三河地方は近世期には小藩が散在し，領主の移動もかなり大きくかった。現在ここは，イカ～類の主要な地域となっている。三河として地域的なまとまりをみせるが，西部の濃尾地方とは違う形式として対立するのである。

三河地方には，また岡崎・足助を通じて信州へ，さらに東部では吉田（現・豊橋市）・豊川などを通じて北設楽郡から信州伊奈谷への交易ルートがあった。信州の伊奈地方に三河と共通するイカ～類が分布するのも，その地域的な近さを言語の面から語るところであろう。

とは言え，尾張内部でも知多地方は三河的なイカ～類が多く，美濃地方山間部にも同じ類が見られる。これは，これらの地方が濃尾地域の主流に属さなかったことを語るものであろう。

では，ここになぜイカ～類が存在するのか。その意味が問題になる。これを言語地理学の見方からとらえると，この分布は，三河地方のイカ～類がかつて古くはこの地域にも勢力を張っていた，それが濃尾中央からの新しいイコ～類に圧迫されて周辺地域に追いやられた。しかし，濃尾・知多の周辺部にはまだその残存が見られる。こうした歴史を反映するものと考えられる。

すると，東部にあるイク～類はどうなろうか。この点はもう少し大きく東海地方全域の中で見定める必要を感じるが，恐らくは三河を中心とするイカ～類にさらに先立つ形式で，それがわずかにここに残存しているものと推測される。

こう考えると，マイ類をめぐるこの地域の方言の推移は，およそ次のように捉えられよう。

かつてこの地方には，いま三河地方にあるイカ～類が広く分布したことが推測される。濃尾の周辺にあるイカ～類は，その残存形と考えられる。さらに遡れば，その前はイク～だった可能性がある。その形が三河地方に散見されること，東三河の田口では，イカマイカンが第一答で，第二答にイクマイカンを答えるが，本人の談では，イクマイカンは〈少ない〉と言うような事から，イク～がかつて存在したものの残存と考えられるからである。

そこにいま濃尾地方にあるイコ～類が生れ，東美濃・西三河にまで及んだ。これは恐らく近畿からの伝播による新しい形式であろう。そのルートは，近畿からは東海道を介して濃尾中央部に根付き，北部へは飛騨川ぞいに，東美濃地方には中央線ルートに沿って侵入したのであろう。しかし，知多・西三河ではかつてのイカ～類に阻止さ

れ，長野へは山脈に隔てられて，美濃地方でも山間部にも及ばず，伝播はここで止まっている。こうして，マイ類によるものは，イク～類→イカ～類→イコ～類と，近畿中央からの伝播がその裾野にあたる東海地方に波状的に及び，今日の分布が出来上ったと考えるのである[注3]。

今日的な状況も含め，この点の経緯を次のようなインフォーマントの証言を参考にして，もう少し詳しく考えてみよう。以下，先回りすることになるが，後に述べる敬語形式の類やウ・ヨウによる形式も含めてインフォーマントの言うところを掲げる。

（1）西美濃地方西部・垂井

ここは，関ヶ原を越えて濃尾平野が開ける最初の地域である。近畿からの諸形式は，まずこの地域に影響を及ぼす可能性が高い。西美濃の垂井では，二人の人がそれぞれ次のように言う。以下，①②・・・などは第1答・第2答の順，〈　〉内は説明内容である。

①イキナハレ　②イコマイカ〈子供が使う〉垂井・女性

①イコー　②イケヨ・イコマイカ〈子供が使う〉垂井・男性

この地域では，敬語を添えた形式やウ・ヨウによる勧誘表現が多く，助動詞マイによる，イコマイカ（イコ～類）は子供が使う，内輪の方言的な位置に下ってきつつあることが考えられる。同じく，濃尾にあるイコ～類も，近畿に近い所ではウ・ヨウ類に押されてやや衰退気味のようである。

（2）濃尾中央の模様

①イコーカ　②イコマイカ〈同輩に使用〉長島町男性

①イコー〈待遇は上〉　②イキャーセンカ・イコマァーカ〈待遇は①より落ちる〉尾張弥富・男性

①イカンカ　②イコマァーカ〈古い〉尾張西部・一宮・男性

尾張西部を中心とする地点しかコメント付の例がないが，この地域ではウ・ヨウによる形式が最も新しく丁寧なもの，マイ類のイコ～類はここでも日常的な使用はされるものの，やや古いものになりつつある模様が推測される。

（3）濃尾と三河の接地点近辺

①イコーヨ〈使用多い〉　②イカマーカ〈古い〉西三河三好町・男性

①イコマァーカ　②イカマイカ〈昔多かった〉尾張東部・大府市・女性

①イカマイカ　②イカメーカ　〈女は，イコマイカを言う・新しい〉豊田市北部・男性　③イコマイカ〈イカマイカも含め，女が言

う〉西三河知立市・男性

①イカマイカ　②イコマイカ〈言わない〉岡崎市・男性

①イカンカエ　②イコマイカ〈新しい〉西三河額田郡・女性

①イカマイカヤ　②イコマイカ〈少ない〉西三河足助町・男性

①イカンカ　②イカマイカ〈イコマイカは少ない〉知多郡美浜町・男性

この地域は，尾張寄りの西三河では，三好・大府・豊田の例のようにウ・ヨウ類やイコマイカが優勢であり，知立・岡崎あたりではイコマイカ・イカマイカの併用に近く，足助・知多あたりの様子からすれば，更に東部へと移るにつれて次第にイカマイカが通常になっていく様子が分る。知立で女性の使用とする証言は，マイ類のやわらかな物言いも推測させる。

（4）東美濃

①イコカエ　②イコマイカ　〈イカマイカは昔・戦前〉東美濃七宗・男性

①イコカエ　②イコマーカ〈言うが少ない〉東美濃可児市・男性

①イコマイカ〈イカマイカは古い〉東美濃山岡町・男性

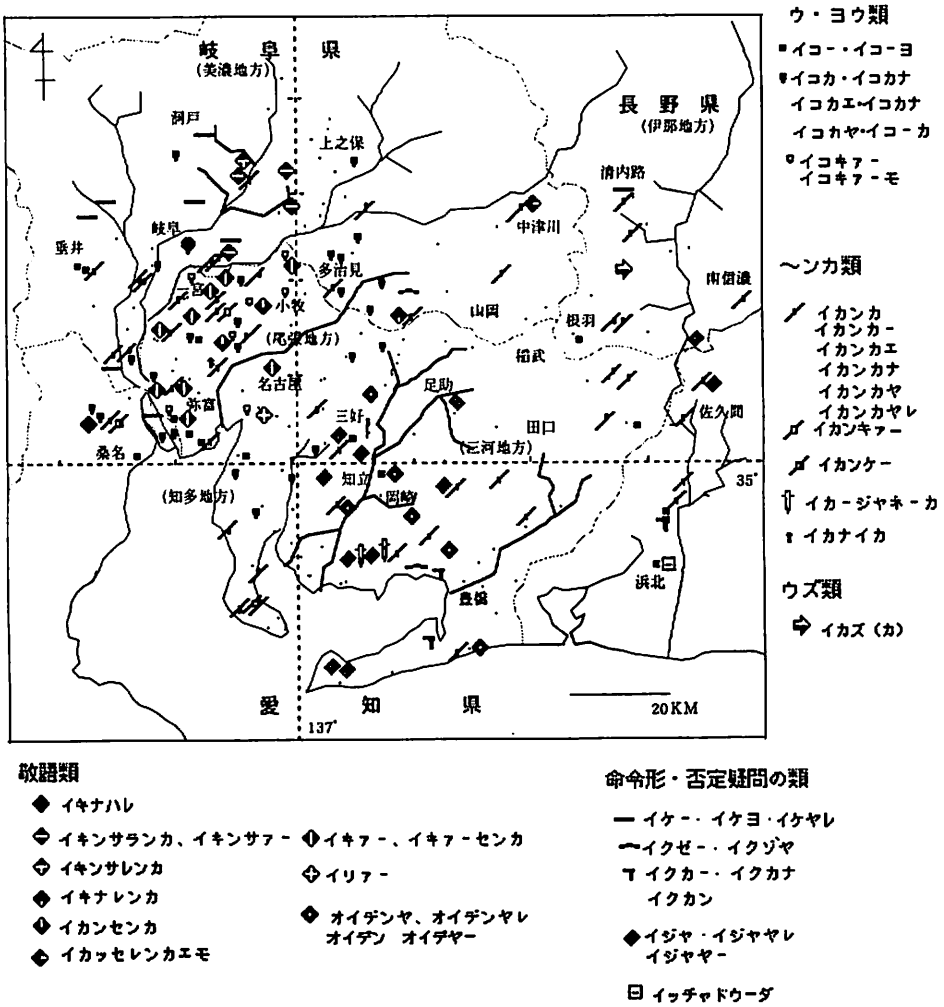
東美濃でもウ・ヨウ類がやや進出しつつあり，マイ類のイコマイカは西部では使用されるが，東部になるとやや少ないと言えようか。

以上の（1）～（4）によっても，全体に，西にウ・ヨウ類によるイコー，中央にはマイ類によるイコマイカ，さらに東になるとイカマイカという分布の模様が確認されよう。こうした現況は，先のマイ類による表現の史的変化とよく対応している。

また，これらの形式は，細部をみると西三河や三河の新城付記の地点に～マイカの末尾のカが脱落した形も散見されて，各地方に個別的な変化もあったことが推測される。また，マイの連母音アイが融合してマァー・エーなどとなる点に地域差があるが，今回はこれについては述べない。ただ，マァーは濃尾中央，エーは知多・三河周辺部にあって，これも地域差に歴史が内包されているものと思う。

当面の地方は，言語の面からすると，一般に濃尾地方の中央が国語史ないし方言的に進んだ事象を受容したり生じさせたりする地域としてまとまり，三河や美濃北部・東部などとは異質な性格を備えることが多い。三河も西三河と東三河とではいくらか差異が見られ，濃尾に隣接する西三河が比較的新しく，東三河になるとやや古態を示しがちである。マイ類をめぐる勧誘形式でもこのような様子が見てとれる。

図２　「一緒に行こうよ」マイ類以外のもの



(二) マイ類以外の形式の検討

図２は，マイ類以外の形式である。かなり多彩であるが，これも一定の整理が可能である。すでに見たものもあるが，以下にそれぞれの形式ごとに考えてみる。

ウ・ヨウ類

まず，大きな特色は，イコカ・イコーカなど小四角類のウ・ヨウ類が西部に厚く分布し，イカンカなど〜ンカ類は全体に分布することである。この分布からすれば，近畿寄りにあるウ・ヨウ類が新しく，広く分布するイカンカ類が古くからあることを意

味しよう。ウ・ヨウ類が西部に片寄ることは，その発生ないし伝播の新しさを示唆し，～ンカ類が濃尾・三河の地域差を越えて広く分布することは，すでに十分の伝播の期間をへて広まった有力な形式と考えられるのである。

さてかつて述べたが，この地方の意志表現の形式は，ウ・ヨウによるものとウズによるものとがある[注4]。意志の用法は図３のように，前者は濃尾中央部に発達しているのに対し，後者は三河地方周辺以東に厚く分布して，地域を分け合っている。文型を変えて調査すると，図４のように，濃尾中央付近にもウズ類の伏流のあることも判明するが，これは古態的な用法の残存と解釈される。すると，かつて広くウズを中心とした意志の助動詞のあったものが，西部から次第にウ・ヨウ類に取ってかわられていることが明らかになる。このウ・ヨウ類は，近畿から伝播した新しい共通語的な形式である。

これを参考にすると，イコカなどの形は意志のウ・ヨウ類が勧誘表現に転用されたものであることが明白であり，分布が濃尾中央に限られることも当然なのである。ウ・ヨウ類は，この地域で最も新しく新鮮な勧誘表現として価値づけられているものと考えられる。それは先に見た（１）西美濃の垂井，（２）濃尾中央付近のインフォーマントの証言からも言えることであった。

なおウ・ヨウ類は東部の遠州・信州近辺にも散見されるが，これらは共通語的な回答が現れたものであろう。多くは別の方言的な形式も回答されている。

～ンカ類

これに対し，否定疑問表現を転用した～ンカ類は国語史の上ではかなり古くからある形式で，この地方でも古くから存在したはずである。否定疑問形を相手に持ちかけることで勧誘の意味に転じさせることも，時代・地域をこえて行われている。ウ・ヨウ類が伝播しない時代にすでにこれが当地域に広く行われたと考えることはこの点でも自然である。

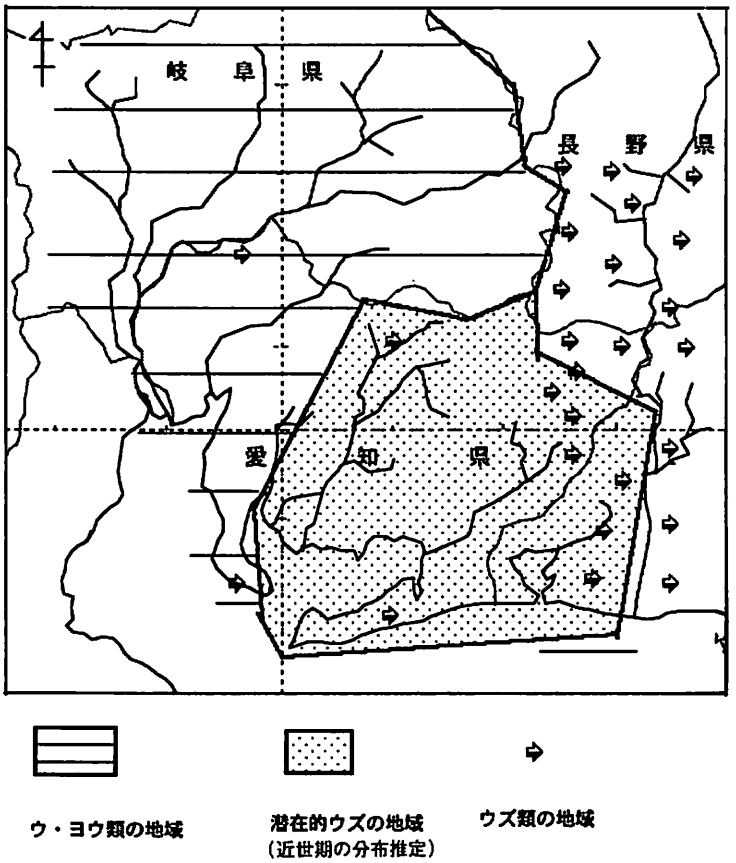
ウ・ヨウ類と～ンカ類との分布差には以上の様な史的経緯が反映されていると考えられる。図２の額田郡近辺に二地点見られるイカージャネーカも，東部方言的な否定辞ナイによるそれである。

ウズ類

では，こうしたウ・ヨウ類に対し，同じ意志の助動詞であるウズ類は勧誘表現に参加していないのであろうか，という疑問が生ずる。

図２によれば，ウズ類の勧誘法は長野県にわずかに見られるに過ぎない。図３・４のように，意志のウズ類の分布は三河地方を中心とするにしてもかなり広いのに対

図3　「どうしようかな」による意志表現



し，図2でのウズ類の分布の狭さは何を意味するのであろうか。

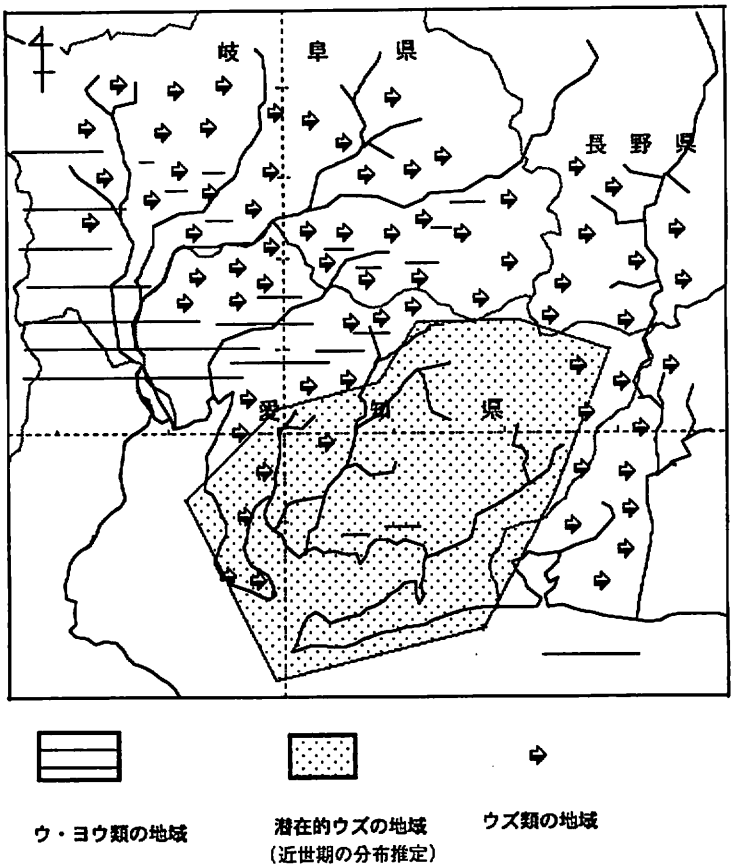
これは，ウズ類がすでに古態の段階に入って勧誘表現に転用される力を持たなくなったことが一つ，もう一つは，図1で見たマイ類，図2で見る～ンカ類など，勧誘表現としてさらに有力な形式の存在したことが原因であろう。

以前は，恐らくウズ類もかつてこの地域に～ンカ類などと混じって使用されたであろう。それが古い形式となるにつれて勢力が弱まり，～ンカ類の盛行やウ・ヨウ類の西からの伝播によって消え去ったことが推測される。この点の経緯については，今回は詳述する暇がないが，過去の文献による検証を予定している。

命令形・否定疑問形の類

次に，かなり簡単な形式に注目してみたい。命令形を主体とするイケヨ・イケなど

図4　「しようと思っていた」による意志表現



が西美濃の北部山間部にある。ほかに，イクカン・イジャ，先の～ンカ類と似た否定疑問形によるイカージャネーカなどが，東部の三河・南信州近辺にある。

これらは，濃尾中央や西三河の都市部に対し，概して周辺地域に存在して，特に敬語形式を使ったり丁寧な口調を要しない地域社会に多い形式と考えられる。こうした地域では，多くの人々は顔見知りで，敬語や回りくどい表現は必ずしも必要でない。丁寧な言い方は，むしろ疎外の表現と受け取られる。そうした地域社会の状況が，このような言語形式にも反映していると考えられよう。

命令形でも場合によれば勧誘となり，イクカンなど疑問形式に土地の終助詞ンを加えた単純なものもあり，またイカージャネーカは～ナイの部分のアイ連母音が融合してぞんざいな訛音形式となっているが，その地域ではそれでよいのであろう。

これらの地域のインフォーマントに他の形式はどうか問うと，「同輩にはこれで十分」とか「遠慮のない言い方でよい」とかの返事がかえってくることも度々であった。

イジャ形については，その出自も問題になるが，いま成案はない。しかし，それがあまり丁寧でない言い方であることは疑いない。

敬語形式類によるもの

次に敬語形式による類を考える。

これには，菱形類を付けたイキナハレ・イキナレンカ・イキンサランカ，イカッセレンカ，イカンセンカ，イキャーセンカなどがあり，また三河を中心にオイデン類も見られる。このほか尾張に散見されるイキャー類も敬語形式から生じた可能性が高い。

これらの出自は，順にナハル・ナサレル・ナサル，（サ）ッセル，（サ）ンス・ヤースと考えられて多彩である。オイデンは一段式の活用にオを付けた形式であり，四段活用出自のものも「オ読ミル」「オ書キル」などの形で使用される。

敬語形式による場合も，表現法の点からすると，～ンカ型に入るイキナレンカ・イカッセレンカなどが最も多く，他に命令形型のイキャー・イリャーがある。オイデンは第2答を見るとオイデンカ・オイデンカン形もあって，～ンカ型のカ脱によって出来たものと考えられる。オイデンヤ・オイデンヤレなどもカ脱のオイデン形に終助詞が付加されたものであろう。

なお，これらの敬語形式はやや女性の使用が多いものの，調査の限りでは性差は特にない。

さてその分布は，先の〈命令形・否定疑問形の類〉と対照的に，都市部ないしその近辺を主とする地域になっている。ここには各種の階層構造が存在し，見知らぬ人との会話や日常関係を円滑にする言語技術を必要とする社会構造がある。こうした地域には，その目的に応じた敬語形式が発達しよう。敬語形式類の存在は，こうした事情によるものと考えられる。

敬語による類の分布の中心は濃尾地方である。これは，近畿からの敬語形式の受容がまず濃尾地方を中心に行われたことと関係深い。それが次第に周辺にもある程度伝播していったのが，今日見られる様相なのであろう。

以前に，当地域の敬語表現形式について考察したことがある[注5]。各種の敬語形式は濃尾中央の地域を中心に発達し，一方，三河地方には「オ出デル」「オ読ミル」など〈オ＋一段動詞形〉だけが主として行われていた。勧誘表現に見えるそれも形式・

分布ともこれらとよく一致しているのである。

いま，その点をくわしく整理してみよう。

この敬語形式類によるものを，図2の第2答までを含んで語形別に使用地点を整理すれば，およそ次のようになる。地点は判別が容易なように，美濃地方は下線を付け，尾張は何もなし，三河・遠州は（　）にいれておいた。

ナハル類（イキナハレ）・・・垂井

ナサル類（イキンサランカ・イキンサー等）・・・美濃市・東美濃富加・葉栗

ナサレル類（イキナレンカ等）・・・土岐・美濃極楽寺

ヤース類（イリャーセ・イリャー等）・・・佐屋・立田・祖父江・一宮・稲沢・犬山・弥富・師勝町・名古屋市・鳴海

（サ）ンス類（イカンセンカ）・・・小牧・師勝

（サ）ッセル類（イカッセレンカ・イカサセンカ）・・・中津川

オイデル類（オイデン等）・・・（岡崎・豊田・安城・音羽町・豊橋南部・額田郡・浜北市）

これによれば，ナハル・ナサル類は西美濃を中心とし，ナサレル類は美濃北部・東部にあり，ヤース類は尾張に広く，（サ）ンス類は尾張の一部，サッセル類は東美濃，オイデル類は三河を中心とすることがはっきりする。

本稿の目的は敬語形式そのものの考察ではないので，論証の過程は省くが，この分布の意味は次のような歴史的経緯を反映していると考えられる。

まず，美濃の西から東へとナハル→ナサル→ナサレルの分布が見られる。これは近世上方語でナサルからナハルが派生したこと，またそれ以前に尾張ではナサレル形が確立していて方言的形式であった歴史の地理的反映であり，こうした経緯と分布とが整合している。

次のヤースは近世前期から後期にかけての上方語「遊バス」が伝播したその変化かと考えられるが，尾張中央に飛火して受容され，方言的に変容したものと思う。敬意はナサレルより高かった。この新しい形式が広まるに従って，次第にナサレルは中央から周辺へと押しやられたのである。こうして，今日，ヤースが尾張中央にあり，ナサレルが周辺にある地理的分布が出来あがったと考えられる。

（サ）ンス類はナサレル類よりやや古い語形で，近世尾張ではあまり勢力はなかった。そのせいであろうか，周囲への広がりは乏しく，尾張内部にわずかに残存する様子である。

（サ）ッセル類は（サ）ンス類よりさらに古くにあった敬語で，近世期の尾張で多用されたものの，敬意はすでにあまり高くなかった。今日この形が尾張から離れた地点で現れるのは，かつて周囲へ伝播し中央では廃れたものであることを示唆する。

オイデル類は，近世尾張でもよく現れる。しかし，今日これは三河以東によく盛行するほとんど唯一の敬語形である。その理由は前稿（注(5)のもの）に譲るとして，勧誘形式でもこの反映が見られることになる。

以上のように，敬語形式類は近世期前後以降の濃尾近辺のその歴史を反映した分布様態が見られるのである。ただ本稿での調査は「親しい人に向かって言う」場面を設定した答えを求めている。するとこれらの敬語による形式も，かなりくだけた言い方，別に言えば待遇表現として敬意はさして高くない形式となって使用されていることになる。

（三）各形式の歴史的展開

以上によれば，この地域の勧誘表現の歴史的展開は，およそ次のように捉えられよう。まず，かつては終止形接続のイクマイカ形（イク～類）がこの地方に行われた時期があったと想定される。次に，これがイカマイカ形（イカ～類）にとって代られた。現在，三河地方を中心に展開している形である。その次に，いま濃尾地方を中心にあるイコマイカ形（イコ～類）が新しく起こり，東部・北部へと展開中と考えられる。この間に，～マイカのカ脱も各地でおこり，またマイに内在するアイ連母音の融合も各地におこって，地域的特色を見せている[注6]。これらのマイ類は，共通語からすれば誤解される恐れを含みつつも，方言的な親しさ・地域的な基盤をもってかなり根強く生きている。

他の類では，イカンカ形（～ンカ類）があり，否定疑問文を相手になげかける表現法として古くから発達していた。マイ類との時期の比較はしにくいが，その表現が容易なここと分布地域から推定して，マイ類のうち早くにあったと推測するイク～類と同じくらいの時期にすでに行われたものではなかったかと考えられる。そして，この形式はその表現法が地域・時代を越えて容易に勧誘表現となることから，時期的にも地域的にも広く展開したものと考えられる。

これに対しウズ類は，この地域にかつて存在したことは確認されるものの，すでにかなり前に他の形式に押されて劣勢になり，今日では東部に局在するだけになっている。その詳しい衰退の理由については，静岡県地方の分布様態とからめて続報で考察したい。

この地域でもっとも新しい形式は，ウ・ヨウ類である。いま濃尾中央部に分布し

て，東部へと展開しつつある。

以上がおよその歴史の推定であるが，各種の形式が相互の競合を繰り返しながら，波状的に西から東へと展開した模様が想像される。その背後には，どの形式をよしとして選択するか，言葉の使い手たる土地の人々の判断がある。

二、各形式間の表現差

分布様態の概要とその歴史についての推定はできたとして，各地に複数の形式が使用される場合も多い。次には，その使用差・表現差が問題となろう。

この考察には，各形式の分布様態に即して地域を区分し，そのうえで各形式の表現性の比較をする必要がある。各地域の共時的な状態は，形式間の相対的な対立関係のありように依るからである。

ひとまず，前節の分布様態から勧誘表現の地域は，

（1）　美濃西部地域

（2）　濃尾中央地域

（3）　西三河地域

（4）　東美濃地域

（5）　東三河地域以東

に分けられよう。

（1）美濃西部地域は，ウ・ヨウ類・～ンカ類・イコマイ類が主として分布する地域である。前節一の（1）の整理も参考にすれば，その表現性はおよそ次のように考えられる。

この地域では，ウ・ヨウ形式がもっとも新しく，上品で丁寧な言い方と考えられる。インフォーマントによればイコマイカは子供が使用しがちとする点で，日常的な方言臭や卑俗感の強いものではないか。イカンカは比較的安定して，新しみは無いが卑俗感も無いもので，いろいろな終助詞を付加することで男女に広く使用されるものかと推測される。敬語形イキナハレは恐らくやや丁寧で女性用であろう。

（2）濃尾中央地域には，ウ・ヨウ類によるイコー，またイコマイカ類を筆頭に各種の敬語によるもの，また～ンカ類が主として使用されている。ウ・ヨウ類の評価は（1）の地域と同じである。この新しさ・丁寧さは他のどの形式よりも大きいと考えられる。敬語形式類の詳細な評価はむずかしいが，概して方言的で柔らかな物言いを特徴とするものであろう。これも，イキャー・イキャーセンカは尾張に，他のナサ

ル・ナレル他は周辺部にあることは述べた。調査の限りでは顕著な男女差はないが，やや女性に多く，いくらか性差のあったことも推測される。尾張西部の佐屋の女性はイキャーセンカを〈女性用〉と答えている。

イコマイカとイカンカでは，前者がやさしい物言いであることが考えられる。また，イコマイカは自分が行くことは決っていて相手を誘う物言い，イカンカはこの制限はないという違いもありそうである[注7]。しかし，一宮の男性は①イカンカ，②イコマァーカ〈古い〉と言う。これによれば，尾張西部地方では，②がややウ・ヨウ類に押されて，古くなりつつあることも考えられる。

（3）西三河地域には，イコマイカ，イカンカ，オイデン，イジャなどが行われる。

知立の男性は①イジャ，②イカンカ，③イコマイカ・イカマイカ〈女が言う〉，と言う。知多の男性は①イカマイ，②イカンカ〈男が使用〉と言う。これから，イカンカよりもイコマイカの方がやさしい物言いであることが考えられる。イジャは男性のみの回答であり，命令形などの類と同じく気の置けない率直な言い方，見方によっては粗野な言い方であろう。この地域は，尾張とくに名古屋の言い方が及ぶ所で，イコマカイ形はそれであろう。ただし，異質的な面も多く，影響が直接的に及ぶとは言いがたい面もある。

ただし，豊田の男性の一人は，①イコマイ〈古い〉，②イジャと答える。男性のせいでイジャを回答するとしても，この地域でイコマイは古くなりつつあるのだろうか。この点は疑問である。

（4）東美濃地域には，イコマイカ類を中心に，新しくイコーがあり，敬語形・イカンカ・イカマイカなども散見される。イコーは，新しい感覚があろう。通常はイコマイカが使用され，イカマイカは古い言い方と意識されていると思われる。イカンカはやや直接的な言い方であろう。この地域は名古屋や岐阜地域の動向がよく及ぶ所と考えられる。

（5）東三河地域以東は，イカマイカ類を中心にイカンカもあり，イジャやオイデンも散見される。ここではイコマイカが侵入しつつあり都会の名古屋の感覚をふくむ新しい言い方，イカマイカ・オイデンは自分が行くことを前提とした柔らかな物言いであろう。

北設楽の女性は①イカンカ，②イカマイカ〈優しい〉と答え，同じく男性は①イカンカ，②イカマイカ〈少し上〉と答える。イカンカは直接的であり，イカマイカが優しく，結果として丁寧な感じになるのであろう。

この他に，遠州・信州南部の地域がある。ここは，ほぼ東三河の様相に似ていると思われるが，ウズ類やイジャもある。ウズ類やイジャが古態的なものと考えられる点で，恐らくイカマイカは他に対しやや新しみのあるものかと推測される。この地域については，さらに遠州・長野県地方の様子も見合わせた考察が必要となる。

おわりに

今回は，東海西部地方に展開する勧誘表現の分布様態とその歴史について，また各形式間の表現性を中心に考察した。しかし，その歴史的な定位は暫定的なもので，これを確実なものにするためには，もう少し広い範囲での分布様態による考察が必要である。また，これを近畿方言を主とする国語史との関連の中で位置付けることで，風通しのよい方言史の記述ができるものと思う。

これらの点については，続報を予定している。

注

（1）江端義夫「中部地方の方言についての方言地理学的研究（Ⅱ）―『海へ行こう(勧誘表現)』の分布とその考察 ―」(広島大学教育学部紀要26・1997年)。ほかにも助動詞マイによる勧誘表現はこの地域の方言の特徴のひとつだけに，芥子川律治「愛知県の方言」(『講座方言学６・中部地方の方言』国書刊行会・1983年・所収）に愛知県内の分布も含めた言及があり，吉川利明・山口幸洋『豊橋地方の方言』(豊橋文化協会・1972年）にも指摘がある。近県では，奥村三雄『岐阜県方言の研究』(大衆書房・1973年)，中條修・編『静岡方言の研究』(吉見書店・1985年）山口幸洋『静岡県の方言』(静岡新聞社・1987年)，『長野県史・方言編』(馬瀬良雄執筆・長野県史刊行会・1992年）などにもその表現性にふれる言及がある。これに対し本稿は，他の形式もふくめた分布研究の記述にたち，その歴史的な研究に進もうとするものである。

（2）その地点は，尾張では名古屋山口町，三河では新城・田口など数地点見られ，東部に多い。

（3）この論証には，イコ～類が京阪語で生じたものであることの証明が必要であるが，詳しくは，近畿地方での勧誘形の歴史とこの地域での形式との対応関係を含めて，続報で述べる予定である。なお，注（1）江端論文は本稿よりも広域を調査しているが，本稿の範囲では類似した分布様態のあることが指摘されている。ただイカマイ・イコマイの変化については見方を異にする部分がある。

（4）拙稿「愛知県方言の分布と歴史ノート（3)」(「名古屋・方言研究会会報」第４号・1987年所収)。図３・４はこれによる概念図である。また近世期尾張近辺の様相は，拙

著『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』（和泉書院・1997年）でもふれた。図3・4の凡例の「潜在的ウズの地域」はこの近世期のウズの分布域を模式的に示してみたものである。

（5）拙稿「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史」（「国語学」166輯・1991年）および注（4）拙著。以下，敬語についての発言はこれをもとにしている。

（6）連母音アイが融合して各種の変母音となるのも，当地の方言の特色のひとつである。機会をみて整理を試みたい。

（7）マイ類のこの点についての指摘は，既に馬瀬良雄氏によってなされている，（注1）の『長野県の方言』を参照。